

塾を出て家路につくころは、もう星が出ていた。ビルの谷間に見える星は、ぼんやりとした光を放っている。星がきれいだななんて思ったことは一度もない。

——ネオンのほうが、きれいだよな。

マウンテンバイクをこぎながら少年はそう思った。こんな薄汚れた街は好きになれない。マウンテンバイクをこぎつづける。途中、いつものようにコンビニエンスストアの前にある公衆電話から家に電話を入れた。

いま塾、終わった。何か買っていくものない。父さん、帰ってる？

それだけを短く言うと、少年は受話器を置いた。母親に言われた調味料とマーガリンを買って店を出たとき、横の路地の暗がりから何かの声が聞こえた。声は、コンビニエンスストアとカラオケハウスに挟まれた狭い路地から聞こえてくる。近寄ってみると、暗がりには段ボール箱がひとつ置かれていた。それが小さく動いている。声は、そのなかから聞こえてきた。

少年は段ボール箱に近寄ろうとして思いとどまり、両手で耳をふさいだ。

——あのなかには、見てはいけないものが入っている。

そのままマウンテンバイクにまたがると、逃げるようにして家路を急いだ。耳元を風が切っていく。少年は、後を振り返ることさえしなかった。

やがて団地の明かりが見えてきた。エレベーターに乗って六階のボタンを押したとき、さっきの音が耳によみがえった。暖かい、小さな声だった。少年は、くちびるをかみしめた。

——犬なんていない。

この世の中に、犬なんていう動物はいないんだ。この寒い夜に、暗がりには置き去りにされた段ボール箱のなかで鳴いていたもの——、あれは産まれたばかりの子犬なんかじゃない。

少年は自分にそう言い聞かせた。だがエレベーターから降りても、さっき聞いた小さな声が耳について離れなかった。

「ねえ、父さん」

遅い夕食をひとりで済ませたあと、少年は決心したように言った。父親はビールを飲みながらテレビを観ている。

「・・・んだけど」

「何だって？」と、父親はめんどくさそうに言った。「何が欲しいんだって？」

「犬・・・、を飼いたいんだけど」

あのな、ここは団地だろう、そういうものは飼えないんだ、何度言ったらわかる。父親は、動物を飼いたいと言うと決まって返してくる科白を繰り返した。

そんなこと、もう何度も聞いた。それでも飼いたいのだ。

「マウンテンバイクを買ってやってばかりじゃないか」

「自転車と犬は違うよ。猫でもいい、何か動物を飼いたいんだよ。この団地で飼ってる人もいるよ、猫とか犬とか」

部屋のなかが汚れる、だれがめんどくさそうをみるんだ、えさ代がたいへんだ。聞き飽きた言葉が返ってくる。もういいよ。少年は自分の部屋に入って塾の宿題にとりかかる。だが、勉強に集中できなかった。ひろげたノートに犬の絵を描いてみる。上手には描けないが、その絵をいつまでも見つめている。

——犬なんていない。

もう一度そう思う。そして犬の絵を描いたページを破り取ると、それを細かく引き裂いて屑籠に投げこんだ。

小学生の要約課題・小6・物語文②

だが耳についた子犬の鳴き声は、いつまでも消えなかった。

少年は体育の時間が嫌いだ。運動神経が鈍いわけではない。少年は、クラスでいちばん背が低いのだ。成長の早い子はもう、大人くらいの背丈になっている。女の子なんて、もっと大きい子もいる。そういう背の高い子とスポーツの競争をしても勝てるわけではない。

体育の先生はそんなことはお構いなしに、みんな一律の、同じ運動をさせてそれを競い合わせる。走ることだって鉄棒だって跳び箱だって、体格の大きな子とは勝負にならない。勝てるチャンスがありそうなのはマラソンか水泳くらいだが、それだって少年は人並みの力しか持っていない。体育なんて拷問にすぎないのだ。残されたチャンスは学校の勉強だけだった。成績が良くなること、それが大きな子に勝てる唯一の対抗手段だった。勉強が好きなわけじゃない。武器なのだ。だが授業中に手を挙げれば、「生意気だ」と言われるし、宿題をちゃんとやっていけば、そのノートを取り上げられる。

少年は、今日も体育の時間を休んだ。校庭の片隅で、みんながサッカーをしているのをじっと見ている。

「お前がチームに入ると邪魔だから、見てろよな」

彼が小柄なことを理由に何かと意地悪をする生徒のひとりが、そう言ったのだ。なにも、ここで見学していたいわけじゃない。下手なりに、みんなといっしょにボールを追いかけて走りまわりたい。でも、そう言われて体育の時間に休まないと、塾に行く途中で待ち伏せされて、もっとひどいことをされる。

——いつか大きくなってやる。

少年は、自分の背丈が校庭に立っている木よりも、もっと大きくなることを想像してみた。そんなことはあり得ないが、みんながサッカーをしているのを見ているより、木のてっぺんの木の葉が風でひらひらと揺れるのを見つめていたかった。

——あそこに手が届いたらなあ。

みんなは汗をかきながら走りまわっている。だが少年は冷たい風のなかで、じっと木を見上げている。

ゆうべの子犬のことを考えた。犬を連れて公園や土手の上を走れたら、どんなにいいだろうと少年は思った。

それを見つけたのは、工場の横の空き地だった。

その日、少年は塾を休んだ。塾を休むなんて、はじめてのことだった。今日は背の高い少年たちに逆らって、宿題を提出した。授業中に手を挙げて、体育の時間にも休まなかった。彼らの言いなりになっているのは、もういやだった。だが塾へ行こうとすれば、絶対に何人かがどこかで待ち伏せしている。そして少年は、ひどくいじめられることになるだろう。

それが恐ろしくて塾を休んだ。少年は川のところまでやって来た。マウンテンバイクを横に置いて、コンクリートの川岸から暮れていく街を眺めた。

——塾へ行けばよかったかな。

休めば、彼らの思う壺だ。それが悔しかった。今日、自分が学校でしたことを後悔なんかしていない。宿題を提出して、手を挙げて、体育の授業に出ることが、どうしていけないんだ。明日もそうするつもりだ。そして明日は、塾にだって行く。

どんなにひどいことをされても無視すればいい。そのうち、あいつらだって飽きてしまうだろう。それ

小学生の要約課題・小6・物語文②

に——、と少年は思った。

——いつかは僕^{ぼく}だって、背が高くなる。

そんな気がするのだ。すこし勇気が湧^わいてきた。なんだか、ほんのすこし、一ミリくらい背が伸びたような気分になった。少年は立ち上がり、夕陽^{ゆうひ}が沈^{しず}んでいく街の家並を見た。

そのとき、それが動いたのだった。手前の、工場の屋根がシルエットになっているあたりで、何か大きな細長いものが、ゆらりと動いたのだった。

——何だろう？

それは、掘削機^{くつさくき}かクレーンのようにも見えた。太いブームが、ゆらりと動いたような感じに見えた。だが、機械にしては不自然だった。

なめらかな、やわらかな動きだ。巨大^{きょだい}でなめらかな動きをするものを、少年は必死になって思いだそうとした。だが、そんなものは思いつかなかった。いったい何なのだろう。

少年はマウンテンバイクを転がしなから工場のほうへ歩いていった。あたりはゆっくりと暮れていく。

そこはヒューム管をつくっているセメント工場だった。空き地には巨大なコンクリート製のパイプが、切り取られた巨人の足みたいにごろごろと転がっている。周囲には鉄条網^{てつじょうもう}の柵^{さく}が張りめぐらされているが、どれもさびていて、どこからでも入ることができた。

少年はマウンテンバイクをそこに置いて工場の空き地に入ってしまった。足元^{うすぐら}は薄暗かった。冬だというのに、ここには雑草^{ざさく}が膝^{ひざ}の近くまで生えている。さっきの何かが見えたあたりまでやって来た。立ち止まって耳^{みみ}を澄^すます。何もいない。

——気のせいだったのかな。

そう思って立ち去ろうとしたとき、明らかに生き物のもつ暖かな気配がした。すぐ近くだった。背後にいる。少年は、ゆっくりと振り返った。

目の前に脚^{あし}が見えた。黄色い脚が、少年の頭上まで伸びている。少年は空を振り仰^{あお}いだ。長い脚の上^{あみめじょう}に、大きな体がある。その上には、クレーンのように長い首がついていた。体にも首にも、黄色い網目状の模様がついていて、それがゆっくりと動いている。

——キリンだ。

声も出なかった。こんな近くでキリンを見るなんて、はじめてだった。キリンは首を揺らすだけで、そこにじっとしている。少年はおそろおそろ手を伸ばして、その脚^ふに触れた。暖かい、やわらかな感触^{かんじよく}だった。毛皮を着た電柱みたいに、それは目の前にすくと立っている。

キリンだ。少年はもう一度自分に言い聞かせた。その言葉と、目の前で起きている現象とが結びつかない。

——どうすればいい？

とっさに、逃げることを考えた。だがキリンはおとなしく、危害を加えそうにはない。少年はそこにしゃがみこんで、雑草をつかめるだけつかむと引き抜いた。それを頭上高く差し出す。まるでエレベーターみたいにキリンの首が降下してくると、少年のつかんでいる草を長い舌で巻き取るようにしながら食べはじめた。

しゃわしゃわと、草をかむおいしそうな音が頭上から聞こえる。少年は上を見上げることができない。怖いのだ。やがて手のなかの草がなくなると、長い、あたたかな舌が、少年の手首をぺろりとなめた。見上げると、キリンの目がすぐ近くにあった。大きなやさしい目をしていて。深く黒い瞳^{ひとみ}が、こちらを見つめている。首をそっと撫^なでてやると、長い首を揺らしながら、薄暗い空に向かって、すうっと上昇^{じょうしょう}していった。

小学生の要約課題・小6・物語文②

風が出てきた。寒い。もしかしたらキリンも寒いんじゃないだろうか。よく見ると、キリンの長い脚が震えている。どうすればいいのかわからない。ここに置き去りにすればキリンは凍えてしまうかもしれない。

少年は走り出した。待ってろよ。何か考えがあるわけではない、ただ何もしないわけにはいかなかった。鉄条網の破れたところまで走ってきて少年は振り返った。闇の中にキリンのシルエットが浮かんで、それがゆっくりとヒューム管の間を移動している。

——待ってろよ。

少年はつぶやくと、マウンテンバイクにまたがって一目散に家のほうへ走りはじめた。

父親はまだ帰っていなかった。そっと自分の部屋に入ろうとしたが、母親が台所から声をかけてきた。

「あら、塾は行かなかったの？」

「忘れ物を取りに来たんだ」

少年はとっさにそう言った。うそをつくのがうまくなるなんて気に入らなかった。だけど工場の空き地で見たことは、とても話せない。

少年は部屋に入って図鑑をひろげた。

キリン。

いったいあの動物は何を食べるのだ。草を食べることは、さっきわかった。だけどキリン用のペットフードなんて、コンビニエンスストアにもディスカウントショップにも、売っているのを見たことがない。動物図鑑には、アカシアの葉や小枝を食べる、と出ている。

植物図鑑を出して、アカシアを調べる。校庭の隅の日溜まりに生えている、あの大きな木かもしれない。

——だけど。

と、少年は思った。あんな大きな動物をどこで育てたらいいんだろう。

「塾、まだいいの？」

母親の声がする。いまから行く、そう答えて図鑑を閉じると、少年は玄関から表へ飛び出した。

飼うつもりだった。いや、飼えないだろうけれど、あの空き地にほうっておくわけにはいかない。あれは子犬なんかとは違う。僕が拾ってあげなければ、だれが助けるんだ。

エレベーターで一階まで降りる。集会室を覗いてみた。集会室の天井は低くて、ここには入れそうもない。駐輪場やポンプ室も見たが、どこも狭すぎるし、すぐにだれかに見つかってしまいそうだ。

少年は途方に暮れた。やはりこういうことはだれかに相談したほうがいいのか。学校の先生に？駄目だ、わかってくれそうもない。友達なんていないし、父や母は、もっとわかってくれない。

少年は工場のほうへ歩いていった。もうあたりは真っ暗になって、ところどころに立っている水銀灯の明かりが、工場と空き地を照らしている。

闇のなかに、キリンの巨大なシルエットが見えた。少年は立ち止まった。キリンが気がついて近寄ってきた。

ゆらゆらと、大きなシルエットが揺れながら近づいてくる。だめだ。近寄って来ちゃいけない。犬だって猫の子だって、見かけたらすぐに、そこを離れなきゃいけないんだ。近寄ったり触ったりすれば、絶対に離れられなくなる。

——こっちへ来ちゃいけない。

小学生の要約課題・小6・物語文②

だが黒いシルエットは、少年の視界いっぱい大きさに近寄ってきた。柵のそばで立ち止まるとキリンは長い首を下げて、すり寄ってきた。ぺろり、と大きな舌が少年のほおをなめた。

だめだ。団地でキリンを飼うなんて絶対にできっこない。少年は、涙が出そうになった。

(しかし、この後、少年は、団地の屋上でキリンを飼うことを思いつき、キリンを団地の屋上に連れていく。以下の文章は、この小説の最後の部分である。)

キリンは、アカシアの葉をおいしそうに食べた。少年が大きなビニール袋に入れて持ち帰ったものをすっかり食べ終わると、少年といっしょにしばらく街を眺めた。今日もまた、街はゆっくりと暮れていく。

「名前をつけてあげなくちゃ・・・」

そう言って、体を撫でてやると、キリンは黙って大きな首を揺らした。

キリンは、鳴き声を立てることはほとんどない。そう、凶鑑に出ていた。僕と同じだ、と少年は思った。

そんなふうにして少年は、キリンを飼いはじめたのだった。

何日かすると、この街にあるアカシアの木の場所をすべて把握した。マウンテンバイクにまたがって街を走りまわり、アカシアの木のあるところを地図上にマークしたのだ。一か所で採取するのはまずい。すこしずつ、目立たないように採取することにしたのだ。これだけアカシアの木があれば、当分は大丈夫そうだった。

塾へも通うようになった。少年が木登りばかりしているのを不審に思ったのか、それとも彼の表情が生き生きとしてきたせいか、いじめたりする人間はあまりいなくなった。

少年はだれにもキリンのことを教えなかった。だが、いつかは見つかってしまうかもしれない。それを恐れた。

「ねえ、父さん・・・」

何日かして、少年は父親に言った。相変わらずテレビを観ながら、父親はめんどうくさそうに言った。

「こんどは、何が欲しいのかな」

「べつに・・・そうじゃなくて」

「どうしたんだ？」

父親はテレビの音量を小さくして少年の顔を見た。珍しく、話を聞いてもらえそうだった。

「何かあったのか？」

「その・・・」

キリンを飼いたいんだ。そう言おうとした。だが、それは声にならなかった。言おうとした瞬間、少年は気づいたのだ。

「ちょっと出てくる」

言い残して、少年は外に出た。エレベーターの最上階のボタンを押しながら、少年は考えていた。

——言ってはならないのだ。

キリンを飼ってもいいかなんて、父親に訊いたりしてはいけない。そのことに少年は気がついたのだった。

すでに僕はキリンを飼っている。そのことに親は気づかないかもしれない。いつかは気がつくのか、それともずっと気がつかないままなのかはわからない。だが僕は、自分からそのことを言ったりしてはいけ

小学生の要約課題・小6・物語文②

ないのだ。

そのことに、たったいま気がついた。あの麒麟は、僕だけの麒麟だ。

エレベーターが最上階でとまる。階段を上がって屋上に出た。夜の街がある。暗がりに給水塔きゅうすいとうのシルエットが見える。避雷針ひらいしんと集合アンテナが闇の中に立っている。広い屋上には風が吹いていた。

街の灯ひが遠く小さく、きらきらと光っている。少年は空を見上げた。満天の星だった。都会の星がこんなにきれいだなんて、いままで知らなかった。

——僕は麒麟を飼っている。

少年はそう思った。そして、だれもいないひっそりとした屋上でひとり、長い時間、街を見下ろしていた。

薄井ゆうじ『飼育する少年』

この文章の後半の下線部において、僕が『麒麟を飼ってもいいかなんて、父親きに訊いたりしてはいけない』と言っているのはなぜですか。あなたの考えを自由に書きなさい。